法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

〈論文〉「路地」からのユーカラ : 中上健次の描いたアイヌ

鈴木, 華織

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
106
(開始ページ / Start Page)
46
(終了ページ / End Page)
61
(発行年 / Year)
2022-09-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030168

〈論文〉

「路地」からのユーカラ

――中上健次の描いたアイヌ――

鈴木　華織

1．はじめに

斎藤環は中上健次を「徹底して「関係性」の作家」とし、「彼の作品には、彼が生涯を通じて接してきた夥(おびただ)しい人々、土地、書物、音楽といった対象との関係性が、きわめて濃密に反映されています。（中略）およそ彼ほど、作品と人生とが相互に浸透し合うような生を生きた作家はいなかった[1]」と評しており、中上の作品内に登場する土地といえば、作家自身の故郷である紀州の熊野地方が思い浮かぶ。

中上は、自身の創作と熊野との関係について数多く言及しており、例えば「生のままの子ら」（一九八三年）では、「和歌山県新宮市、いわゆる紀州・熊野と呼ばれたそこの市の真中に走った小高い山の、裏側のふもとの長山という部落が私の生れたところだが、私の小説のほとんどは、そこをモデルとして書かれているのだが、そこで私だけ一人、何故小説を書いたりするようになったのか分からない」と記している。この「部落」とは被差別部落であり、中上作品のトポスである「路地」のモデルを指す。そして、この被差別部落が八〇年代初頭に同和政策による開発事業によって消滅してしまってもなお、熊野と虚構空間である「路地」は不可分な関係にあり[2]、さらに「熊野はまた日本中のどこにでも在り、さらに日本を越えて世界中に存在するとも思っている[3]」として、その世界観を拡げようとしていたのであった。

このような「関係性」がみられる中で、中上個人とは縁故が薄いと思われる北海道のアイヌが登場する作品が二つ存在する。唯一、北海道の地が舞台として登場し、アイヌ

の若者及びコタン（アイヌの居住地）と「路地」との関係が描かれる「カンナカムイの翼」（一九八二年）と、北海道の地は出てこないもののアイヌの青年ウタリが登場する「異族」（一九八四年～未完）である。恐らく、中上作品から北海道やアイヌを連想する人は少数であろう。その理由としては、該当する作品が二作品のうえに片方しか完結していないことと、熊野の〝磁場〟が強すぎるため、論者や評者から北へ目が向き難かったことが推察される。しかし、重要なのは〈二作品しか〉ではなく、作家個人と土地との関係を鑑みて〈二作品も〉書いたという視点ではなかろうか。〈二作品しか〉とは簡単に言えるが、「路地」を失った後の世界を描くうえで、アイヌを登場させた意味とその書かれ方を分析する必要があると考えられる。

拙論では、中上がアイヌに何を見出して作品に登場させ、どのように描いたかを論じることで、「路地」消失後に展開しようとした世界観の一端を探る。

2. アイヌへの視線

具体的に作品の分析を行う前に、中上がアイヌをどのように捉えていたのかを述べておく。

中上の小説で初めて北海道が登場するのは「鳳仙花」（一九七九年）であり、主人公フサの異父兄の吉広が、季節労働者として和歌山から夕張近辺の炭鉱に行く設定となっている。しかし、昭和のはじめ頃に年端もいかない少女だったフサにとっての北海道は、兄をはじめとする周囲の大人たちの話から想像するしかない場所として存在しており、そのため作中にアイヌは登場しない。なお、「鳳仙花」の次に北海道が登場するのが「カンナカムイの翼」となっている。

一方、中上自身の持つアイヌ観を知る術として、梅原猛による中上への〝講義〟を収めた『君は弥生人か縄文人か』（一九八四年、朝日出版社）がある。

同書内の「第二講　アイヌ、日本の原基」の中で中上は、梅原の主張するアイヌ文化を「日本文化の基をなす文化」とし、〈アイヌ（蝦夷）＝縄文文化＝日本の原基〉と唱える「アイヌ同祖論」に賛同している。ここでは論旨から外れるため、梅原の「アイヌ同祖論」についての是非は問わないが、中上は「梅原さんがおっしゃった日本の大事なこと、つまり、精神世界のほとんどのボキャブラリーはアイヌ語から出てきて残っている。取ったというより、残っている」として「たとえば神はカムイからきた……」と語り、日本文化を指す言葉は「まずアイヌ語と重ねてそこから派生してきている」という梅原説を、「本当のことだ」として「ギョッとした」と語っている。

そして、アイヌ語研究の話題になると、中上は言語を含めた歴史を研究する際に起こる認識の違いから、「政治問題」や「社会問題」をはらむアイヌや朝鮮や被差別部落が

研究から抜けている現実に対して「その研究はどうしてもやっぱり欲しいですよね」という思いを持って次のような行動をとったと語っている。

ぼくは言葉はぜんぜんダメなんですけどね、アイヌ語をちょっと勉強したことがあるんですよ。いまでも北海道へ行くたびにアイヌの部落を回ってるんですけどね。日高の平取のあたりとかを中心に……。

この発言から、年譜には記載されていないもの[4]の、個人的に幾度か北海道にあるアイヌの集落を訪れてアイヌ語を習っていたことが知れるが、それと同時に、アイヌ文化についての知識も身に付けようとしていたであろうことは想像に難くない。

この中上のアイヌへの興味と行動は、同講義内での「ぼくは特に、紀州に生まれて、しかも熊野で生まれているから、いってみれば、そこから日本を見るみたいな形でしょう。そうすると、日本が、要するに、平地の思想なんかであってたまるか、みたいな感じがあるんです」という気概が示すように、地政学的見地から発する〝中央〟への反発と、被差別という歴史を持つ者への思いから発したものであると推しはかれる。

加えて、中上はアイヌ文化研究家の萱野茂に会いに行ったことを明かしたうえで、アイヌへ寄せる期待を次のように話している。

ぼくはむしろ、梅原さんとちょっと違うんですけど、アイヌ民族解放戦線とか、そういうもののほうに共感するところがあるんです。……もしそんな戦線があるならですよ。ないんですけどね。そういう過激なほうに共感するような人間なんですけど。もうちょっとアイヌ人自身がね、血の濃い人間たちが頑張ってほしいっていう感じがするんですがねえ。何か聞き耳立てないと、その言葉すら聞こえてこないという感じですから。

中上の述べた「梅原さんとちょっと違う」とは、梅原が称賛した〈萱野茂が独学でアイヌ語を「志を立てて、ばあちゃんに訊き直して学んだ」という地道な研究〉に寄せる期待とは「違う」という意味であり、「アイヌ民族解放戦線」にある「解放戦線」の言葉から、〝夢想〟といえども武力闘争も辞さないといった、中上が持つアイヌによる過激な民族運動への期待がうかがえる。そしてそれは、「しかも日本で危険なのは、みんな同じでなくては困る、人が人として、他人として立ってるっていうことも認めたくないみたいなとこがあるんですよね。違うと怖い」という、日本に根深く存在する「単一民族」の幻想を討ち払うための「解放戦線」であるのだ。

梅原はこの講義で、「アイヌは蝦夷の後裔（こうえい）」であり、彼らを「異族と認識することによって、初めて倭人の自己意識が可能である」としていて、中上も梅原のこの意見に賛同している。つまり、他の民族が日本に存在することを受け入れたうえでないと自己の民族意識は育たないということだが、中上が述べたように、日本は「みんな同じでなくては困る」という意識から多様性を認めたがらない風潮があることは、疑う余地がないであろう。

他者を他者と認めたうえで寄せる、アイヌへの期待。この講義より前の八二年に発表された「カンナカムイの翼」では、「路地」とアイヌコタンという他者同士の〝同盟〟の可能性が示されており、その期待を窺わせている。

以上をふまえて、次節からは小説作品ごとのアイヌの論考を行う。

3．「カンナカムイの翼」のアイヌ

「カンナカムイの翼」は、連作短篇集『千年の愉楽』（河出書房新社、一九八二年）[5]の掉尾を飾る作品である。

『千年の愉楽』は、「路地」の「中本の一統」と呼ばれる「高貴な腐り澱んだ血」が流れる美青年たちの破滅的な生と夭逝の宿命が、「路地」で唯ひとりの産婆で「中本の一統」が背負う業を肯うオリュウノオバの幻想的な語りで綴られている。「カンナカムイの翼」は「中本の一統」の達男が主人公であり、彼が季節労働者として渡った北海道の炭鉱で知り合った、達男に背格好がよく似たアイヌの青年「若い衆」が登場する。

ある時、達男は「若い衆」を連れて北海道から紀州の「路地」へ帰ってくる。オリュウノオバは二人から北海道の話を聞き、アイヌとコタンの存在を初めて知って「路地」との相似へ思いをはせるが、オバは「宙をなめらかに滑るように歩く」二人の姿から、人間離れした「異様な」気配を感じとる。やがて達男と「若い衆」の二人は「路地」から北海道の炭鉱へ戻り、朝鮮人労働者らによる労働待遇改善の動きに合わせた暴動を起こそうとするが、達男は労働者たちの裏切りに遭い命を落としてしまう。だが、「若い衆」が新しい達男となって「路地」に帰ってくる、というストーリーが展開される。

なお、作品の時代設定については「当時、時節が変り、強制徴用組が何度も暴動を起こした後」という記述から、鎌田哲哉が「「カンナカムイの翼」についてのノート」（「情況」第三期第二巻第四号、二〇〇一年）において、「敗戦直後の九州や北海道の「炭鉱」（鉱山）の諸状況」を鑑みて占領下の時期としているように、一九四五年に赤平や夕張の鉱山で韓国・朝鮮人や中国人の労働者らによる大規模な暴動があった[6]ことから、この時期を「時節」とするのが妥当だと考えられる。

「カンナカムイの翼」において、アイヌの文化や生活、

そして彼らを取り巻く迫害や差別の状況については、さほど踏み込まれた書かれ方はしていない。文化については、コタンにいる老婆のウップノフチの口と腕に刺青（シヌイ）があること、家（チセ）の脇に天日にさらした鹿の毛皮があることなどが書かれている。そして、彼らの生活やアイヌの置かれた状況については、フチが「若い衆」に「山で鹿や熊を狩ってユリや草をつんで長いこと暮らしていたのに（役人や警官が―引用者）畑を耕せと言い、畑を耕すと今度は別に移れと命令する」と放った嘆きや、「若い衆」がコタンの暮らしが昔と大きく変化し、男性は都会に出たり鉱山で働いたりしているのでコタンには女子供しか残っていないから「生活補助（ヤヤ）」が欠かせず、たとえ昔のように狩猟採集の暮らしをしても、森林開発が進んで食糧が自給できないことを憂いている、という記述がある程度となっている。

このようなアイヌの描写は、詳しい者からすると表面的な書き方で批判の対象になりえるものかもしれない。それは、次に挙げるアイヌが内地の観光客からどのようにみられているのかを辛辣に述べた萱野茂の文章に、どこか通じるところがある。

いったいあんたら（内地から来た観光客ら―引用者）、アイヌ以外の日本人は、アイヌのことを何と考えてるんだ。アイヌは今でも、屋根も壁も全部茅でつくった昔ふうのアイヌ・チセ（アイヌの家）に住んで、鹿や熊を主食にして、アッシ（オヒョウの木の皮の繊維でつくった着物）を着て、毎日熊まつりだ何だと歌ったり踊ったりしながらくらしていると思っているのか。

（萱野茂「アイヌの精神」、田村善次郎、宮本千晴監修、須藤功編『あるくみるきく双書　宮本常一とあるいた昭和の日本18　北海道②』㈳農山漁村文化協会、二〇一二年）[7]

しかし、作中のアイヌの表面的な書かれ方は中上の意図するものであり、史実や現状の告発よりも、多くの内地人が漠然と持つ〈アイヌのイメージ〉に寄せていると考えられる。では、なぜ事実よりもイメージを優先させたのであろうか。それは、「カンナカムイの翼」がアイヌを取り巻く諸問題への直接的な言及よりも、「路地」とコタンから発する、英雄を詠うアイヌの詩曲ユーカラ[8]として書かれたからだと考えられる。

オリュウノオバは、アイヌの「若い衆」から、ユーカラにある英雄ポンヤウンペ譚のことを聞く。「若い衆」は、「ポンヤウンペはキラキラひかる揺り籠（シンタ）に乗ってやって来た神（ユカラ）謡の、半分は自然（カムイ）・神、半分は人間の名だ」とオバに話して「神謡（ユーカラ）の粗筋を説明したが、」オバはその話から「そのポンヤウンペの生れるくだりが、あまりに達男の生れる時に類似しているので、達男と若い衆が話をつくっている」と訝しむ。

作中では「神謡」に「ユーカラ」のルビがふられているが、厳密には違う。「神謡」はカムイユーカラといい、人間（アイヌ）以外の動植物や自然現象、生活道具に至るまで魂が宿っているカムイを詠う叙事詩を指す。一方、ユーカラは人間の英雄を詠う英雄詞曲のことを指し、カムイユーカラよりも娯楽性が高いとされる。[9]

「若い衆」がオバに話したポンヤウンペとは、ユーカラを代表するアイヌが理想とする半人神人の英雄であり、同じ主人公ながら物語のバリエーションは豊富に存在している。久保寺逸彦は、ポンヤウンペ譚は「アイヌの持つ叙事詩中、最も文芸的な発達を遂げたもので、短くても二～三千行、長大なものは数万行におよぶ一大雄篇も少なしとしない」ものであり、その長大さゆえに「途中まで伝承されて、結末を喪失して、完全な形では伝わらないものも少なくない」としている。[10]

このように、長大かつ様々なバリエーションがあるポンヤウンペ譚だが、一定の物語の〝型〟が存在しており、それは世界中に散らばる古典的な英雄伝説などにも共通する〝型〟でもある。安藤美紀夫『ポイヤウンペ物語』（講談社文庫、一九七六年）内の神宮輝夫による「解説」では、ヤン・デ・フリースの英雄伝説の分析を元に次のような属性があるとしているが、[11]「カンナカムイの翼」にもこの属性がみられる。

①英雄の両親のこと
②英雄誕生のこと
③乳児である英雄の生命がおびやかされること
④英雄の養育にまつわる出来事
⑤英雄が不死身の性質を獲得すること
⑥竜などの怪物退治という英雄的行為があること
⑦英雄は大きな危機を乗りきって乙女を得ること
⑧英雄が死者の国へ旅すること
⑨英雄が幼年で姿を消した場合は、長じてから帰り敵をうちたおすこと
⑩英雄の死

ユーカラ発祥の地とされる石狩市浜益では、ポンヤウンペを「独り育った者」や「孤児」と呼んでいたとされていて、[12]この呼び名のように出生時や幼少時にふた親が揃っていないことが多い。これは右記①に該当しており、オリュウノオバがポンヤウンペ譚を聞いた時に「あまりに達男の生れる時に類似している」と訝ったが、達男は出生時に父親が出奔し、母親から疎まれて育っていることから、ここがオバの言った「類似」する点だと考えられる。

そして、②の誕生時に起こった怪異なエピソード（達男の場合は大蛇の出現）や、④の親以外の者に育てられること（達男の場合は「路地」の大人らが面倒をみていた）なども「カンナカムイの翼」にみられる英雄伝説の属性であるが、最も特徴的なのが⑤の不死身の体を手に入れることである。

達男と「若い衆」は、背格好の他に生い立ちに共通点があり、「路地に生れれば達男になり、路地（コタン）に生れれば若い衆に変る、とそれぞれが思うほど似ていた」と、お互いの〝交換〟の可能性が示される。しかし、達男は「路地」出身の自分はアイヌにはなれないこと、また、「若くして死ぬ運命なのだ」という「中本の一統」の血を自覚し、「若い衆と自分は同じだが、狭い小さな和人（シャモ）の町の山の隅に出来た、かさぶたのような路地で生れた中本の血は、誰とも交換不可能だ、と識った」と、「若い衆」との「交換不可能」を悟る。一方の「若い衆」は、「誰とも交換不可能」だとする達男の思いを、軽々と乗り越えてしまう。「若い衆」には、達男のような血筋の業はない。だから「あれ（達男―引用者）の分も生きたろと思て」と「路地」にやってきて、呪われた血を断ち切った新しい「中本の一統」、言うなれば「路地」の新しいポンヤウンペとして生きようとする。つまり、「達男」は不死身の性質を手に入れたと言えるのだ。そのことを示すため、「若い衆」の容姿の描写は希薄であり、名前も与えられていない。彼は、達男との〝交換〟が可能な人物としてあるのだ。

この、達男と「若い衆」の「交換不可能」から一転しての〝交換〟の成立について、高澤秀次は「中上健次から久間十義へ――「カンナカムイの翼」とその「異聞」」（「北の発言」一九号、二〇〇六年）において、中上が現実で「路地」を失った後に、「「路地」的な世界を経巡る果てしない旅に出るのだ。（中略）「交換不可能」な故郷の風土と血脈を、胸に刻み込んだ彼は、それ故に世界に遍在する「路地」を求めて彷徨するのである」としたうえで、以下のように述べている。

> 「誰とも交換不可能」なものを、疑似的に再現させたわけではなかった。むしろ「交換不可能」なものが、真の「他者」を通じていかに歴史的に再起し得るかを、中上は「路地」解体の最大の教訓として示唆したのではなかったか。

「路地」は、「誰とも交換不可能」な唯一の空間としてある。たとえ〈「路地」とコタンが似ている〉としても、加えてオリュウノオバが、「北海道に点在する人間（アイヌ）の路地（コタン）と路地を結び、（中略）戦争をするだろう」と両者の〝同盟〟を夢想しても、「路地」の者と「真の「他者」」は「交換不可能」なのだ。

その一方で、言葉という文学的な要素で「真の「他者」」であるアイヌが「路地」を再起させる可能性は本作によって示された。「カンナカムイの翼」では、「路地」の言葉にアイヌ語のルビ、逆にアイヌの言葉に「路地」の言葉のルビが振られる。それは、同化政策によってアイヌからアイヌ語を奪った倭人（中上）が、アイヌの言葉と「路地」の言葉の融合させることによって新しいユーカラを創ったか

のようでもある。

以上から、高澤の述べる中上が「いかに歴史的に再起し得るか」の回答が、中上ならではのユーカラである「カンナカムイの翼」であると言えるのではなかろうか。

4.「異族」におけるアイヌ

加藤典洋は、「異族」に登場するアイヌの青年ウタリについて、次のような指摘をしている。

そこ（小説内―引用者）でほんとうに小説の登場人物として生きているのは、主人公のタツヤのほかに、在日朝鮮人のシムくらいで、たとえば「アイヌ族」のウタリは、たんにマイノリティの数合わせの都合上、この小説に動員されているにすぎない。

（加藤典洋『少し長い文章』五柳書院、一九九七年）

未完の大長篇「異族」[13]を論じた論文で、ウタリをメインに論じたものは管見の限りでは発見できなかった[14]。論文中にその名は出てきても、彼は加藤が述べている「数合わせ」のような扱いとなっている。

ウタリは、胸に青いアザ[15]を持ち、空手の猛者である「青アザの兄弟」の一人として作品の中心に配置されているが、「路地」出身のタツヤや在日韓国人二世のシムに比べると存在感が薄い。井口時男は「ウタリにいたっては、極度に寡黙なうえ、語り手がほとんどその内心に焦点化することがない」（『危機と闘争　大江健三郎と中上健次』作品社、二〇〇四年）とし、また柴田勝二も「タツヤ、シムと比べてウタリがさほど鮮明な輪郭を持っていないのは、彼が担っているアイヌ民族という社会的文脈が中上にとってさほど親しいものではなく、日本社会における被疎外者的存在のネットワークを形成する一要素としての側面が強いからであろう」（『中上健次と村上春樹〈脱六〇年代〉的世界のゆくえ』東京外国語大学出版会、二〇〇九年）としているように、二人とも加藤とほぼ同様の見解を示している。

一方で、「異族」に登場する人物たちへは、次にあげるように、ウタリに限らず加藤が「生きている」とするタツヤとシムも含めて内面を持たずに平板だという評価が下されている。

叙述は単調にして平板、夥しい数の登場人物はほとんど個性も内面的人格も与えられず、ただ将棋の駒のように空間を南へ、南へと移動するばかりで、物語はいつまで経っても深遠さに到達せず、ひどく荒唐無稽な形で中断されてしまう……。『異族』に浴びせられた批判に最大公約数を求めるならば、およそこういったふうになるだろう。

（四方田犬彦『貴種と転生』新潮社、一九九六年）

紙幅の都合で右記の詳細を述べるための人物描写の分析を「青アザの兄弟」に絞るが、まずタツヤは、作中「路地のタツヤ」と再三にわたって彼の属性が示され続けるが、「タツヤは路地に何も感慨もわかなかった」という矛盾がみられる。加えて、彼は何の屈託もなく「兄弟」の後見人である右翼の大物の槇野原から右翼団体の会長を任されて「てんのう陛下万歳」と口にするものの、右翼団体の活動実態や政治的理念は明らかではない。

片やシムは、同胞の歴史からは距離を置いていて「壁に貼った日章旗にも何のこだわりもなく朝夕の礼も出来れば、神棚に祈ることも出来た」人物としてある。彼には、中上がテレビ番組のレポーターとして取材した在日韓国人二世の右翼の青年[16]の影が感じられるが、より重視すべきはシムの日本名が「水谷郁男」だということである。「郁男」は、「秋幸三部作[17]」で主人公の秋幸の自死した異父兄の名であり、中上の異父兄の行平氏がモデルとなっている。この兄の存在と自死については、様々な作品に繰り返し登場するほど深く、「関係性の作家」である中上が何の思慮も無しにこの名前をシムに与えたとは考えにくい。しかし、作品は未完となり、結局名前は置き去りにされたまま[18]となってしまう。

このように、作品の中で「生きている」とされるタツヤもシムも、造形的にも設定的にも空虚さをはらんでいる。だがウタリは、二人のような空虚ささえも指摘するのが難しい。それは、前出した井口が指摘した「寡黙」が、口数ではなく読み手に語りかけない「寡黙」を意味するかのようでもあるのだ。

ウタリには、タツヤの〝兄貴分〟として幼い頃から一緒に過ごし、彼の〝重石〟となる夏羽や、シムの恋人で「教条主義者」として彼に日本批判を繰り返し述べるミス・パクのような、欠けている部分を刺激する人物がいない。また、ウタリの過去は、日高の出身であることと、「青アザの兄弟」らにつきまとうシナリオライターのミドリカワが槇野原のもとに連れてきたこと以外は明らかにされておらず、彼の人物像は、タツヤとシム以上におぼろげとなっている。

そして、作中にはアイヌと相即不離の関係にある「カムイ」という言葉が三回しか出てこない。しかも、その一つはタツヤが「カムイやシャクシャインに誓うんだな？（以下略）」と、タツヤがウタリに問うのであって、ウタリからカムイの言葉が出たのではない。従って、アイヌのウタリがどのようにカムイを捉えているのかがみえず、また、〈北方のソ連の領地に誘拐して連れて来たアイヌの少年を空手の戦闘員として養成してアイヌモシリの国を再建させたい〉と語るが、この話も一度きりしか登場しないため、アイヌとしてのウタリの真意が伝わってこない。

では、「寡黙」なウタリは単に「数合わせ」であり、そ

の理由を〈中上が「アイヌ民族という社会的文脈」に親しくないから〉だとしまって良いのであろうか。先述したように、中上自身が北海道のアイヌの集落を何度か訪れていたうえに、その経験からインスパイアされたであろう「カンナカムイの翼」を書いたことを鑑みれば、その理由付けには疑問符が付く。果たして、「親しくない」存在を物語の中心である「青アザの兄弟」のひとりとして置くことは、細部にまでこだわり続けた中上にとってありえるのだろうか。

「異族」は、青アザを持つ者たちが東京―沖縄―台湾―フィリピンと南下をする物語だが、ウタリだけ〝北方〟の人であり、かつ〝国〟に囚われていない。それが、国に対して煩悶を抱えるタツヤとシムの間の緩衝材となって、お互いを〝異族〟と認め合う三人のバランスを取っている。槇野原の暗躍から「民族や国家なぞという錯覚」に「理屈」を持って煩悶せざるを得なくなったタツヤやシムと違い、「理屈をこねまわす気の毛頭ないウタリは、煩悶するシムを見、のたうつタツヤを見て、迷わない正しいアイムモシリという錯覚を助長され、迷わない正しいアイムモシリだから当然の事として国境を越え、英雄シャクシャインのように三つの軍、三つの勢力、三つの国家の錯綜するダバオに立つ」とあるように、ウタリはたとえ「錯覚」といえども、「迷わない」という、いわば中立的な立場にいる。

また、ここで「ウタリ」という名前に着目したい。前出した井口の論中では名前について「彼ら（青アザを持つ登場人物―引用者）の名前の多くも、ウタリ、ウガジン、カンカン、といったふうに、固有名というよりただのステレオタイプな記号である」[19]としているが、その分析は「ステレオタイプな記号」で終わってしまっていて、「ウタリ」がアイヌ語で「同胞」を意味することは見落とされている。そしてこの「同胞」とは、「路地」の「同胞」であることを意味している。「異族」の語り手は、「青アザの兄弟」について「身をよこたえた三人が三人共、路地の記憶がある事が不思議だった」としており、タツヤだけではなくシムもウタリも「路地」の記憶を持っていて、胸のアザ以外に三人は「路地」という共通項を有しているのだ。

中上の「路地」について、津島佑子は「中上健次だけの特権的な物語の場」であったとして、以下のようにその文学的な意味を論じている。

> たぶん、彼は彼自身にかかわりの深い、それだけに愛憎の思いが極端に強くある「路地」こそが、彼の目指している物語の磁場として存在していることを、この時点（『枯木灘』で「路地」を描いた時点―引用者）で「発見」したのだったろう。そして、この「発見」を徹底して方法化するために、彼の世界で語られる出来事に、社会一般に普遍化されるような要素を一切、認めるわけにはいかなくなったのだろうし、登場人物

たちの個々の現実的な顔も否定しないわけにはいかなくなったのだろう。出来事のひとつひとつが、登場人物のひとりひとりが、「路地」つまり、中上健次によって強引に必然的な意味を付与され、その意味付けの内側で動きはじめる。『枯木灘』から、中上健次は小説を書く散文家ではなくなり、壮大な英雄叙事詩をいつまでも歌いつづけようとする詩人、琵琶を鳴らして物語を語りつづける盲目の法師に成りかわってしまったとも言えるのかもしれない。

（津島佑子「アニの夢　私のイノチ」『アニの夢　私のイノチ』講談社、一九九九年）[20]

垂水千恵は、「津島佑子試論――補完し合う想像力：異族から野蛮へ」（「ときわの杜論叢」第六巻、二〇一九年）において、引用した津島の論を「卓抜」と評し、「路地」から発する物語を「壮大な英雄叙事詩」として読むことについて、「異族」が四方田犬彦の述べる〈内面のない登場人物が駒のように移動するだけ〉[21]であるなら「納得が行く」としている。ここでは論点から外れるため垂水論の分析は差し控えるが、「異族」を「英雄叙事詩」として読むことに「納得が行く」という見解に補足を加えたい。

「異族」の登場人物が、個人の内面よりもその属性が優先されることは、これまで述べてきた。それは、彼らを属性の代表として描くことで、「異族」も「カンナカムイの翼」と同様に「英雄叙事詩」的な作品、いわばユーカラを目指していたものだと考えられる。

「異族」には、「カンナカムイの翼」の続篇であることを想起させる箇所がある。それは、「カンナカムイの翼」で達男が鉱山に「路地」の人間、朝鮮人、アイヌが「不思議な縁」によって集まっていると思うのだが、この設定と達男の思いは「異族」の「青アザの兄弟」に繋がる。

そして、「カンナカムイの翼」でオリュウノオバが「路地の血の達男と人間（アイヌ）の血の若い衆が日本の新しい理想郷をつくる為の固い契りの印として、互いに腕を切って血を流しすすり合ってでもいてくれれば一層元気づけられると思う」とした行為を、「異族」の「青アザの兄弟」は「秘密の儀式」として実行し、「道場に集まる三人の空手の猛者は、互いに何一つ隠し立てすることも要らない義兄弟の仲になった」のであった。これは、「路地」の記憶に加えての、三人の絆の証しでもある。

しかし、彼らは「兄弟」になる「儀式」を行い、かつ「新しい理想郷」のための旅を伴にしても、〝同盟〟を結ぶことはできなかった。それは、「固い契り」で結ばれた「兄弟」のそれぞれが「路地」の記憶を有していても、「路地」が「誰とも交換不可能」なものとしてあるうえに「強引に必然的な意味を付与され、その意味付けの内側で動きはじめる」場所でもあるという、共有と専有が共存している矛盾をはらんでいるからである。そして、その矛盾に中上は気

付いていた。だから、タツヤの「路地」の記憶は曖昧であり、シムとウタリの「路地」は具体的な描写がないのである。この「路地」をめぐる矛盾の存在こそ、お互いが「真の「他者」」であること証しであり、〝同盟〟を結ぶ壁になるものであった。

「カンナカムイの翼」では「路地」は「交換不可能」であり、〝同盟〟を結べないことを描いたが、「異族」では一転して「新しい理想郷」という野望を仕立て、その野望の元に集結するマイノリティたちに〝同盟〟の可能性を一縷の望みとして託してみたのではないかと考えられる。中上は、「カンナカムイの翼」に続いて「異族」でも日本における〝異族〟のあり方を英雄譚（ユーカラ）として示そうとした。しかし、結局は「路地」という場所の特異性によって、青アザを持つ〝英雄〟らの関係性が矛盾をはらんだものになり、それが「異族」がとりとめもなく、終えることができない物語になった要因であると考えられるのだ。

5. おわりに

近年、内閣府による「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（二〇一九年）の制定や、それに合わせて二〇二〇年に白老町に「ウポポイ（民族共生象徴空間）」がオープンするなど、アイヌやアイヌ文化について理解を深めようとする動きが大きくなっている。

それは、アイヌによる着実な活動が実を結んだ結果であるが、それに加えてアイヌやアイヌ文化が広く知れわたるきっかけとして、漫画「ゴールデンカムイ」のヒットがある。作品は、二〇一四年八月から二〇二二年五月まで「週刊ヤングジャンプ」で約八年間にわたって連載され、単行本は一九〇〇万部以上の累計発行部数を記録し、アニメ化もされたうえに実写映画化も決定している。[22]

「ゴールデンカムイ」では、アイヌ文化が細かく丁寧に描かれているが、作者の野田サトルはインタビューで、これまで漫画で描かれることが多くなかったアイヌ文化を取り上げたことについて、次のように語っている。

> まさに「多くないから」ですね。読者さんにとっては、新鮮に感じたのではないでしょうか。デリケートな題材だから、だれもが尻込みしていたのもあると思います。やはり迫害や差別など、暗いイメージがついてまわりますし。でも、アイヌというテーマを明るくおもしろく描けば、人気が出るはずだと確信していました。取材でお会いしたアイヌの方からも言われたんですよ、「可哀想なアイヌなんてもう描かなくていい。強いアイヌを描いてくれ」と。[23]

確かに、登場人物するアイヌの人々は皆、表情豊かで聡

明かつ力強く、「可哀想なアイヌ」からは程遠い。加えて、漫画ということもあってアイヌの生活も分かりやすく知ることができ、内地の人間にもアイヌが身近になったと考えられる。それは、前出した萱野茂による観光客への嘆きからは大きく進もうとしているかのようである。

一方、須田茂は『近現代アイヌ文学史論――アイヌ民族による日本語文学の軌跡』（寿郎社、二〇一八年）において、「アイヌの人たちと日本（和人）との歴史を振り返れば、一五世紀のコマシャインの戦い以降、ほぼ一方的に日本によってアイヌ民族への抑圧と差別が行なわれてきたという両者の関係は依然として変わっていない。アイヌ民族と日本とのより正確な歴史とその十分な理解にいたるまでにはまだまだ乗り越えなければならない課題があると言ってよい」と歴史の影を指摘している。野田の述べたアイヌへの「迫害や差別など、暗いイメージ」は、須田の述べる「両者の関係」から発するものであり、アイヌをとりまく状況が良い方向へ進んでいるとはいえ、六百年近く経った今でもなお根深い問題として残り続けている。そのため、アイヌは創作行為において長い間「デリケートな題材」と忌諱されてしまっていることは否定できない。

しかし、中上は幾度もコタンを訪問し、アイヌが「デリケートな題材」なことを承知して二作品に描いた。それは、唯一無二の空間である「路地」を創造し、そこに被差別者の物語を紡いだ中上ならではの手法であり、「路地」が係わるもう一つのユーカラとしてアイヌを描くことによって、「ゴールデンカムイ」で野田が目指すものと共通する「可哀想」ではない「強いアイヌ」像を示そうとした意図を読み取ることができるのではなかろうか。

最後に、残された問題について言及をしておく。「カンナカムイの翼」及び「異族」も、第二次世界大戦敗戦後の〝異族〟の在り方を問いかける作品である。しかし中上は「戦争」について、〈自分にとっての戦争とは大逆事件を指す〉と公言してはばからなかった[24]。

では、なぜアイヌを描いた両作品とも中上が距離を置く第二次世界大戦と絡めて書かれているのか、という疑問が生じる。しかも、先の大戦におけるアイヌについては、中上はほとんど沈黙を通しているのだ。当然、背景には敗戦及び戦禍によって生じた国家や国土、人民の分断やそこから生じたゆがみがあるが、これらの戦後処理の問題が作品に登場させた〝異族〟たちにどのような影響を与えたのか、といったことなど、その分析をより深く行う必要があると考えられる。

注

（1）中上健次『紀州　木の国・根の国物語』（角川文庫、二〇〇九年改版）における斎藤環の「解説」より。

（2）「路地」と熊野との関係については、阿部勤也との対談「中世ヨーロッパ・被差別民・熊野」（一九八四年、原題「交流・交

感　中世ヨーロッパ⇄熊野」）において、中上は「熊野の熊野たるトポスはどなたが考えても、ありがたい神社にあるのではなく、底の抜けたような、そのまま黄泉につながっているような被差別部落にあると思う。僕の書いている〝路地〟とはその意味です。だから熊野はどこか？　とたずねるのなら、それは路地のことだと覚えていてください」と語っている。（出典：柄谷行人、絓秀実編『中上健次発言集成2』第三文明社、一九九五年）

（3）中上健次「熊野・アジア・わが文学」（一九八一年、出典：『中上健次エッセイ撰集［青春・ボーダー篇］』恒文社、二〇〇一年）

（4）『中上健次全集15』（集英社）内の「年譜」及び『中上健次電子全集21　中上健次と柄谷行人』（小学館、二〇一七年）内の「年譜」を参照。なお、年譜上での北海道に関する事項は、一九七九年八月二日にNHKのテレビ番組「ほっかいどう7：30」に出演し、積丹半島の夏の漁師をリポートしたという記述のみである。

（5）『千年の愉楽』所収の六作品は、一九八〇年～八二年の間に「文藝」へ不定期に掲載された。

（6）『北海道の20世紀』（北海道新聞社編集・発行、一九九九年）内「北海道一九〇〇年代年表」には、一九四五年に「九月一八日　赤平・茂尻鉱で朝鮮人労働者一一〇〇人、戦時中の労務管理に抗議して暴動」および「九月二五日　夕張市三菱大夕張鉱で中国人労働者数百人、待遇改善などを要求して騒乱（～二六日、警察官など二人死亡）この頃道内各地で朝鮮人、中国人労働者の闘争による暴行事件相次ぐ」とある。双書は、宮本常一監修・編集、日本観光文化研究所発行の月刊誌『あるくみるきく』全二六三号（一九六七年～一九八八年）から「日本国内の旅、地方の歴史・文化、祭礼行事などを特集したものを選出し、それを原本として地域および題目ごとに編集し合冊したものである」としている。

（7）

（8）ユーカラの表記については、ユカラ、ユーカラ、ユカラ（ラは小文字）などがあり、ユカラ（ラは小文字）が発音に一番近い表記とされているが、拙論では作品のルビに則ってユーカラの表記とする。ちなみに、ユーカラは場所によってはサコルペ（もしくはサコロペ、ロは小文字）とも称する。

（9）久保寺逸彦『アイヌの文学』（岩波新書、一九七七年）

（10）前掲注（9）

（11）ヤン・デ・フリースによる英雄伝説の型の分類については、論文中にある神宮輝夫による『ポイヤウンペ物語』の「解説」の他、松前健「英雄譚の世界的範型と日本文学」（『論究日本文学』四十四号、一九八一年）も参照。

（12）前掲注（9）

（13）「異族」は「群像」一九八四年五月号より「熊野集第二部」の副題を掲げて連載が始まる。当初は「短期集中連載」と銘打っていたが、結局は幾度かの連載中断を挟みながら一九九二年に中上の死によって未完に終わり、単校本が九四年に講談社から発売されている。

（14）後述する井口、柴田、四方田の各論の他、「異族」をメインに

論じた大和田俊之「サーガのあとに　中上健次『異族』とウイリアム・フォークナー『寓話』」（「ユリイカ」二〇〇八年一〇月号）や、浅野麗「代替歴史の欲望に抗う――中上健次『異族』の一側面――」（「昭和文学研究」第七十六号、二〇一八年）などでもウタリは論の中心に存在していない。

(15) 登場人物の胸にある青いアザは、旧満州国の地図に擬され、作中で展開される満州国再建の野望の象徴となっている。青アザを持つのは、タツヤ、シム、ウタリの「青アザの兄弟」の他、赤ん坊のBボー、琉球のウガジン、台湾の高砂族のカンカン、「路地」と黒人の混血児のマウイ、アザがあることで戦時中に槇野原と関係を持ったフィリピンの老婆の合計八人。ゆえに曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」との類似性が多くの論者より指摘されており、作中でも「八つの玉を握ってこの世に生れた八犬伝の志士のように」として「八犬伝」に言及している箇所がある。

(16) 中上がリポーターを務めたNHKのドキュメンタリー番組「ルポルタージュにっぽん」の「ある右翼の誕生」（一九七九年二月三日放送）において、日の丸と一緒に韓国の旗を掲げ「天皇陛下万歳」と言うことに抵抗を感じないとする在日韓国人二世の青年が登場する（参照：桜井均『テレビの自画像』筑摩書房、二〇〇一年）。なお、東浩紀は前田塁との対談（「父殺しの喪失、母萌えの過剰　フラットな世界で中上健次を読む」「ユリイカ」二〇〇八年一〇月号）において「中上の小説の力や固有性は、じつはそういう現実とのベタなつながり（作中の登場人物や場所が現実で特定できること―引用者）で支えられていた」と指摘している。

(17) 竹原秋幸が主人公の「岬」（一九七五年）、『枯木灘』（一九七七年）、『地の果て　至上の時』（一九八三年）を指す。

(18) 中上の死後に「異族最終回三〇〇枚」と題するシノプスが発見されるが、シムの日本名には具体的に触れられていない。

(19) 井口時男『危機と闘争　大江健三郎と中上健次』（作品社、二〇〇四年）

(20) 津島は引用以外でも中上の「英雄叙事詩」について言及しており、『中上健次全集4』（集英社、一九九五年）の「月報5」内の解説「母の語りを破壊する時」では、〈中上が盛んに口にする「物語」を「英雄叙事詩」という言葉に置き換えて考えてみた方が作品を理解しやすい〉としている。

(21) 四方田犬彦『貴種と転生』（新潮社、一九九六年）

(22) 単行本の発行部数は、二十九巻までが刊行されていた二〇二二年五月現在の数字（「まんたんWEB」https://mantan-web.jp/article/20220406dog00m200026000c.html を参照。二〇二二年七月一九日最終閲覧）である。なお、実写映画化については、監督およびキャストや公開年月日等の詳細はこの時点（二〇二二年七月）では発表されていない。

(23) 宝島社「このマンガがすごい！　WEB」内「『ゴールデンカムイ』野田サトルインタビュー　ウケないわけない！　おもしろさ全部のせの超自信作！」https://konomanga.jp/interview/51952-2/2（二〇二二年七月一九日最終閲覧）

(24) 中上は「物語の系譜　佐藤春夫」(一九七九年)において「戦後に紀州新宮に生まれた私に、第二次世界大戦、太平洋戦争は、存在しなかったとさえ思えるのである。というのは、熊野、紀州新宮が経験した戦争とはあの大逆事件でしかない」とし、「カンナカムイの翼」では「路地を巻き込んだ戦争」としてオリュウノオバが大逆事件を語る。

参考文献

(財)アイヌ民族博物館監修『アイヌ文化の基礎知識』(草風館、一九九三年)

本多勝一『アイヌ民族』(朝日新聞社、一九九三年)

付記

中上健次作品の本文引用については、特に記述が無い限り『中上健次全集』一～十五巻(集英社、一九九五年～一九九六年)に拠った。

(すずき　かおり・本学博士後期課程三年)